

遺跡祭りと地域活性 —千葉県芝山はにわ祭を中心に—

櫻井 準也（尚美学園大学総合政策学部）

わが国において遺跡など埋蔵文化財をめぐる環境が大きく変化してきている。その一つとしてあげられるのは、従来から議論されてきた遺跡や史跡の保護や整備の問題に加えて観光利用を含めた遺跡や史跡の活用の問題が検討されるようになってきたことである。これに対して、遺跡の活用の方法の一つとしてあげられるのが、現在全国各地で開催されている「遺跡祭り」である。全国各地で開催されている「遺跡祭り」には、平成 24（2012）年に第 50 回をむかえた静岡県「登呂まつり」のように半世紀以上も前から開催されているものもあるが、「遺跡祭り」は 1980 年代から徐々に増え始め、現在では全国 100 か所以上で開催されている。「遺跡祭り」の主催者は、実行委員会、地元の自治体、教育委員会、博物館、埋蔵文化財センターや埋蔵文化財調査事業団、観光協会、商工会、NPO 法人など様々であるが、実行委員会を中心に多くの関連団体が共催・協賛する規模の大きな「遺跡祭り」も見受けられる。このように、「遺跡祭り」には当初多かった地元の教育委員会や博物館が主催し、主に文化財保護や生涯学習活動の観点から実施される教育普及型の「遺跡祭り」だけでなく、郷土芸能、コンサートやダンスの発表会、移動動物園、福引や抽選会、地元物産販売など遺跡とは直接関係ない催しが主体となっている地域おこし型の「遺跡祭り」も増えている。

本発表では地域活性という観点から「遺跡祭り」について考えるため、千葉県芝山町で昭和 52（1982）年から実施されている「芝山はにわ祭」の事例を紹介する。毎年 11 月に開催される「芝山はにわ祭」は古代人に扮装した人々による一連の儀式（降臨の儀、交歓の儀、行列の儀、歓迎の儀、昇天の儀）が祭りの中心となるが、メインステージでは歌謡ショーや地域住民の踊り、その周辺では地元産品即売や露店、福引大会、クイズ、モチ投げ大会、ミニ動物園などが開催され、様々な年代の人々が楽しめる芝山町最大のイベントとなっている。一般に「遺跡祭り」が成立する要件として、①取り上げた題材（遺跡）の在地性・真正性、②開催するにあたってのエピソード（物語）の存在、③仕掛け人の存在があげられる。本事例では、①は町内に芝山古墳群が存在し、かつて殿塚・姫塚において「地域発掘」（市民発掘）が実施されたこと、②のエピソード（物語）は祭り開催の契機となったエピソードや苦労話などで成田空港建設問題がこれにあたり、③の仕掛け人は祭りの開催に中心的な役割を果たした地元の有力者や学識経験者ということになる。また、「遺跡祭り」による地域活性は興業的な成功だけでなく「地域アイデンティティの創出」という重要な側面を持っている。特に古代人に扮した地元の中学生や子ども神輿や山車でイベントに参加した地元の小学生は祭りを通じて「芝山＝古墳・埴輪の町」を強く意識することになるが、これは通常の埋蔵文化財の普及活動では難しい地域アイデンティティ形成の起点となる。

地域に残る有形・無形の文化財をどのようにその地域の活性化に生かすかという問題について、今後様々な視点から議論を積み重ねてゆく必要がある。本シンポジウムがその契機となることを期待したい。